

特集「山口の町の漆器の歴史」～室町時代から現在まで～

■室町時代の漆器

山口の町の漆器の歴史は室町時代が最も古いものです。そのころ大内氏が朝鮮や明との貿易で漆器を輸出入していたことが双方の記録からわかっています。また、大内壁書から、町に塗り物職人がいたことが推測されています。

当時のものとしては「漆塗足付盤」「漆絵枝菊椀―大内椀」（共に県指定文化財）、大内義隆が厳島神社や防府天満宮に寄進した硯箱（共に重要文化財）が残っています。

また、山口市宮野の初瀬遺跡（十六世紀の寺院跡）より漆器椀が出土しています。大内氏館跡から漆膜だけなら出土しているように木が残るのは珍しいことです。外面に赤色漆が使われていて、「明」「延」の文字が高台に書かれています。

明応九年（一五〇〇）、山口で大内氏が足利前將軍をもてなしたときの料理にも冷汁に漆器を使ったことがわかっています。

①初瀬遺跡出土漆器



②前將軍饗宴料理



大内塗膳(岩本與一郎)



大内塗膳(河合辰之進)



④大内塗輸出用ライターセット



最盛期の大正時代には五十人の塗工職人が、後河原町を中心に工房をかまえ、活躍しました。

與一郎の弟豊三郎も大内塗職人になり、指導や新商品開発に努め、発展に尽力しました。また、大正八年に豎小路に開設した山口県立工業試験所の功績も多大なものがあり、この卒業生から大内塗職人が何人も生れました。

■江戸時代の特産品漆器

天保年間（一八三〇～四三）、山口の町では椀を作っているところが、後河原町を中心に三十軒ありました。主に庶民向けの椀や汁物椀を大量に製造していました。

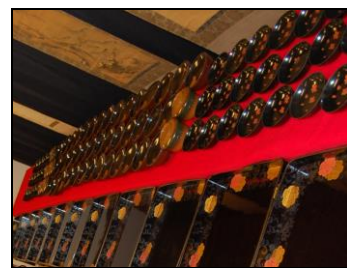
なかでも丸盆は「雪舟盆」と名付けられ、独特の形をしていました。胡桃で三つ足を成し、花や人物風景画が黒漆の上に描かれています。

雪舟盆は明治時代まで作られており、その後、大内塗が再興するにつれ、とってかわられました。

③雪舟盆



料亭菜香亭の漆器



■料亭菜香亭の漆器
明治十年（一八七八）頃創業した料亭菜香亭では、地元の漆器は使わず、すべて輪島塗でした。膳は二十一種類四百六十三点、椀は二十四種類七百三十七点、これだけの数がいまでも残っています。

同じ絵柄で何十点とあるのが料亭らしいところです。

■現在の大内塗

山口の代表的なお土産に大内人形があります。大内塗の製品として最も売れているものです。

素材の木はエゴの木（チナイ）を使っています。県内2社のろくろ師が加工しています。

人形の形の木に下地漆を塗ること数回。のち水研ぎで下地研ぎをし、下塗りします。さらに下塗り研ぎをし、そのあと中塗漆で中塗りします。そして、中塗り研ぎをし、また中塗りをする。と数回。中塗りを終えて上塗りをし、絵付けに入ります。

一つの人形を完成させるのに半年以上かかる仕事です。

人形の製作過程



⑤人形の絵付過程と5社の人形



平成元年（一九八九）大内塗は伝統的工芸品に指定されました。中国地方の漆器では唯一です。これは、山口の町が漆器の産地として歴史あるものと認められたということです。

しかしながら現在、塗師職人は年々減少しています。いまでは工房は六社しかありません。後継者がいるのは一社だけで、他は年配の職人です。行く末が危惧されているところです。

- ※①②市文化財保護課所蔵
- ③市歴史民俗資料館所蔵
- ④山口ふるさと伝承総合センター所蔵

平成23年9月20日発行
第22号

発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会

山口市菜香亭だより

西の菜時記

山口市菜香亭だより

西の菜時記

平成23年9月20日発行
第22号

発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会